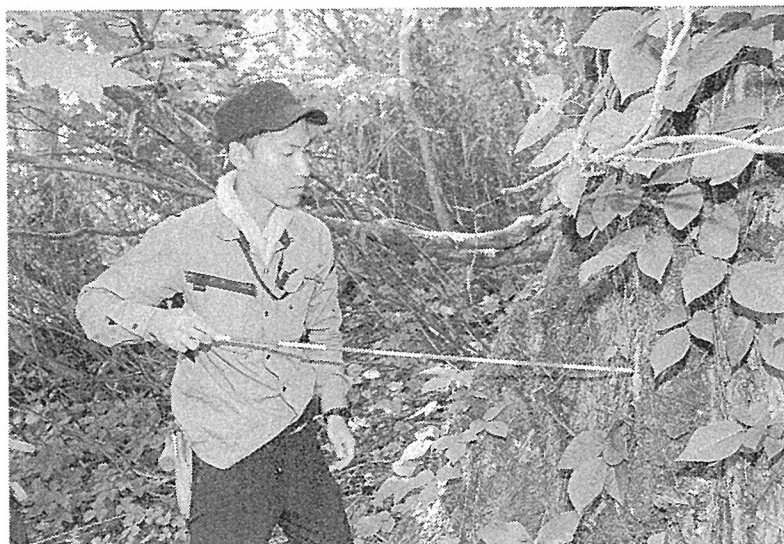


2020年(令和2年)7月7日(火曜日)

NPO法人増毛山道の会

ミズナラの巨木「健康診断」



増毛山道に立つミズナラの巨木の健康診断を行う
樹木医の崎川さん

北海道遺産に指定されている増毛山道に立つミズナラの巨木の「健康診断」が4日、行われ、札幌市在住の樹木医が樹勢などを検分し、健康状態を確認した。
(長谷見直也)

樹木医が状態を確認

増毛山道は江戸時代末期の安政4年(1857年)に浜益、増毛両場所の請負人だった伊達林右衛門が私費を投じて整備し、明治期に完了した現在の増毛町別荘と石狩市浜益区幌を結ぶ

全長32キロの山道。NPO法人増毛山道の会(渡邊千秋会長)と留萌振興局が、平成22年度に増毛町別荘と岩尾間約16キロを復元。翌23年度から体験トレッキングを実施しており、28年10月に

全線の再生作業が完了。一昨年には、石狩市の「濃屋(ごきびる)山道」とともに北海道遺産に登録されている。

健康診断には、NPO法人ezorock(エゾロック)のコーディネーターで木製玩具などを販売する合同会社森のピタゴラス(本社・札幌市)の代表社員を務め、樹木医、木育マイスターの資格を持つ崎川哲一さん(28)とezorockのボランティアリーダーで北海道大学農学部森林科学科4年の松山由美さん(21)が訪れ、増毛山道の会の小杉忠利事務局長ら会員3人が随伴。車両と徒歩で同山道岩尾分岐のそばに立つミズナラに向かった。

増毛山道の会によると、ミズナラの巨木は「山道沿線に立っている樹木では最も太い」とされ、高さは約20メートル、幹の周囲は太いところ

で5・2メートルほどあり、直径は約1・6メートル。根元の部分は一部で腐食が始まっているため空洞化が見られ、「数年前には大きなマイタケが採れた」という。崎川さんは、鉄製のくさびや木のハンマーなどを使って古木の表面をたたき「打診」を行ったほか、根の張り具合や枝振りなどの樹勢をチェック。「木が元気で樹木の耐久度が問題なければ『健全』、元気がなければ『要観察』、木の元気がなく、かつ耐久度がなければ『危険木』と判断される。森林の中など人の出入りがほとんどない場所では、街路樹のような判定はできないが、ここは風もほとんど当たることがなく、今見た感じでは危険な感じはなく樹勢的には元気な感じにみえる。葉の枯れや樹形などから見ても、かなり状態は良い」と診断。樹齢は200年から千年の間、育ってきた環境にもよるが、だいたい500年ぐらいではないかという。小杉事務局長は「岩尾への出口と幌への分岐点に立っている木であり、往時には分岐の目印に使われていたのかもしれない」と、歴史ロマンをかき立てていた。